

第二室第二詩 無垢な言葉

川が凍るとき

氷の下では水が流れ続けている。

空がぼんやりと曇るとき

地球の下に別の世界が姿を現す。

私の心が孤独なとき

どこかで、別の心が私の名を叫ぶ

楽園だけで聴こえる暗号コードに乗せて。

私の心の耳が聴こえないのか？

それとも、無垢な言葉を話せる者が誰もいないのか？

無垢、それは言葉に意味が授けられるとき、

その存在から駆け去っていくもの。

私はそれを見ていた。

それを感じていた。

私の上上げた瞳が、無垢の棲家を目の当たりにした時

紅揚の内に、私はその秘密を解き明かした。

そこから目を逸らすことは出来なかった。

目を逸らすことなど出来なかった。

この世は、まどろむ心たちと虚ろな愛の中にある。

しかし、そんな世界が心に光を満たせるはずがない。

私の渴望とは、あまりにもかけ離れている。

私の心は、その渴望から離れることはない。